リチャード・ライトと『カラー・カーテン』

「黒人研究の会会報」 第 24 号

(1986)

9 ペイジ。

7 月例会:神戸外大(7 月 12 日〉

リチャード・ライトと『カラー・カーテン』

玉田吉行

『ブラック・パワー』に引き続いて、今回は、『カラー・カーテン』を取り上げました。フランスに移住してからのライトは、抑圧の問題を、より広い視野からとらえようと努力していました。１９５０年には、インドの首相パンディット・ネルーにあてて「抑圧に反対するだけではなく、人類の発展のために闘うには、世界の人々の団結が必要であります」という旨の書簡を送っています。したがって、アジア・アフリカ諸国の初めての大規模な会議に、ライトが駆けつけたのは、自然のなりゆきであったと言えます。ライトは、ゴールド・コーストへ出かけた場合と同様に、数冊の本を読んでから現地に乗り込んでいます。

今回の発表は、次の順序で行ないました。

１． バンドン会議について（朝日新聞１９５５年、１９６５年、１９８５年の記事を参照にして）

２． バンドン会議と日本（ナタラジャン著『広島からバンドンへ』岩波書店に触れて）

３．ライトとバンドン会議（ネルーへの手紙と『ブラック・パワー』に関連して）

４．『カラー・カーテン』に対する評価

５．私の評価

前回の『ブラック・パワー』の場合もそうでしたが・政治・経済・歴史などに疎い私には、ずいぶんと荷の重すぎる作品でした。しかし、何とかライトを正当に評価したいと願う現在、「ライトを評価する場合、作品だけではなく、闘争的知識人としての業績をも同様に評価すべきである」というファーブルさんの指摘がどうしても耳から離れません。当分は、少なくとも当分は、「苦難」の道は避けられないようです。

発表をひとつのきっかけにしたいと思います。